

幼児に言葉の力を育む読書環境の充実

～原 豊一郎『どんぐり通信』『どんぐり文庫』の考察を通して～

児童教育学科 林 嘉瑞子

1 はじめに

平成29年に告示された幼稚園教育要領では、幼稚園と小学校の教育の接続が重視され、幼児教育において育みたい資質・能力、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明示されている。幼児期において育みたい資質・能力は、「知識・技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」であり、これらの資質・能力は、平成29年3月告示の小学校学習指導要領に示された学力の3要素との系統性が図られている。

改訂された幼稚園教育要領の〈言葉〉の領域では、ねらい(3)に「日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる」と表現されており、平成20年版のねらいと比較すると、「言葉に対する感覚を豊かにし」という文言が強調されている。さらに、3 内容の取扱いにおいては、「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」が示され、さらに、「(5) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。」¹⁾が追記されている。

「言葉そのものへの関心を高め、言葉の美しさやおもしろさ、言葉の微妙なニュアンスや音の響きなどを言葉遊びや絵本等を通して感じ、こうした感覚をもとにして言葉の理解やコミュニケーションを広げることが言葉の獲得にとって重要であると示されるようになった。」²⁾

本稿では、原豊一郎が1981年2月～1996年2月までの15年間、毎月発行した「どんぐり通信」に掲載された『子どもと絵本』（絵本の紹介）と「どんぐり文庫」の活動の考察を通して、幼児が絵本を通して言葉を豊かにするための読書環境の充実について検討する。

2 昭和39年（1964年）版と平成元年（1989年）版の幼稚園教育要領

まず「どんぐり通信」が発行された当時の幼児教育にかかわる背景を知るうえで昭和39年（1964年）版と平成元年（1989年）版の幼稚園教育要領における「言語」と「言葉」の領域について見ることにする。

昭和39年版の「言語」の領域においては、「1 人のことばや話などを聞いてわかるようになる。(5) 先生の話す童話を喜んで聞く」。「4 絵本、紙しばいなどに親しみ、想像力を豊かにする。」³⁾ことが示されている。

その後25年ぶりの改訂となった平成元年版から、現在の5領域となり「言葉」の領域名となった。平成元年版 第1章総則 2 幼稚園教育の目標においては、「(4) 日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること」⁴⁾とされている。

「改訂により、『日常生活の中で』という文言が加わっているのは、幼児が主体的に環境とかかわりながら生活体験を通して言葉を獲得していく過程を重視していることがわかる。幼児のことばの指導や文字の扱いについても、昭和39年の幼稚園教育要領でも『聞くこと、話すことを中心』、『幼児の年齢や発達の程度に応じて、日常の生活経験のなかでしぜんにわかる程度』とされており、内容の(10)留意事項の(2)に見るように、幼児自身の興味・関心に沿い、感覚を養うということが強調されている。」⁵⁾

当時の幼稚園教育要領の趣旨が、後述する原の実践のなかでも生かされていたことが伺える。

3 「どんぐり通信」と「どんぐり文庫」の概要

「どんぐり通信」を発行した原豊一郎の実践の概要について、原が平成5年（1994年）に第23回野間読書推進賞を受賞した際の〈受賞者業績・受賞のことば〉⁶⁾を以下に記す。

〈受賞者業績〉

原豊一郎氏は、新潟師範学校卒業後、昭和49年（1974）まで県内各地の小・中学校の教員・校長を歴任し、教職を辞した後、永年の経験から子どもの読書の重要性を痛感し、読書力の向上を図りたいとの思いで私費を投じて蔵書訳4000冊を収集し、自宅の2室を開放して「どんぐり文庫」を開設した。

週1回貸出を行うほか、読書への動議づけとして読み聞かせを積極的に行い、あわせて、本を選ぶにあたっての必要事項についての適切なアドバイスを行って、読書の普及に努めた。（以下、下線・筆者）

「どんぐり文庫」は、最盛時には150名ほどの子どもが利用し、幼稚園から中学校まで通い続けた子どももいる。文庫に通い本の楽しさと喜びを知ったことにより読書力がつき、大学への推薦入学が決まると、父母から喜びの声も数多く寄せられている。また、クリスマス会等、文庫の行事の折には、かつて通ったことのある子どもと親が、手製のクリスマスツリーやケーキを持って文庫を訪れるなど、地域社会の人たちから深く敬愛されている。

毎月1回、本の紹介紙「どんぐり通信」を発行して、読書に対する認識の普及に努めると共に、各種の研修会・講座の講師として活躍し、特に子どもの本に対する理解を訴えたことは、母親はもちろんのこと、市町村における教育関係者に大きな影響を与えた。長岡市中央公民館主催の「児童文学講座」においては、参加した母親たちにより、自主的な読書会「あやの会」が結成され、毎月1回、母親を中心として子どもの本を読む会が氏の自宅において開かれている。

新潟県読書推進指導協会主催の県内読書4会場で行われてきた「読書をすすめる集い」（読書指導研修会）では、講師として多年にわたり活躍し、市町における読書運動指導者の育成に尽力して、読書推進運動に多大の貢献をした。

〈受賞のことば〉

子どもに導かれ、今日、ここまでこの感激を…

私の文庫「どんぐり文庫」は、やがて20年になります。20年の歩みを振り返って、強く感じることは、私の文庫活動は、子どもたちに導かれてここまで来たという感慨です。

昭和50年（1975年）、退職後の生活の充実をと思って始めたささやかな文庫は、何の宣伝もしないのに、子どもたちの口コミでどんどん読者をふやしていきました。1980年代前半は文庫の最盛期で、150名を超える盛況でした。ボランティアの方の助力をお願いしました。子どもたちも、高学年の子どもが小さい子どもに読み聞かせをやったり、積極的に活動してくれました。いろいろの困難もありましたが、子どもの数が多くなりすぎ、自転車置き場にも困りました。長岡は豪雪地です。屋根に積もった雪を何回もおろすと、私の文庫は雪の中にうずまり、何段も雪の階段を降りないといけません。吹雪の日には、手提げに入れてくる本の底に雪がたまり、本をぬらしてくる子もありました。子どもたちは顔や手も真赤にしながら、寒さに堪えて通い続けてくれました。この読書に対する熱意には頭のさがるものがありました。

こうした熱意のほかに、私は子どもたちから、児童文学を教わったと言っても過言ではないと思います。子どもたちの本への反応、子どもが本の主人公と一体となり、冒険をするたのしき、そして時には笑いころげ、悲しい状況には涙する反応に接するとき、私は教職時代には得られなかった子どもの理解を得、子どもの本の持つ奥深さに驚かずにはいられませんでした。これが選書に影響していったことはもちろんですが、私自身の子どもの本への本質的興味につながり、子どものためではなく自分自身のために、子どもの本に傾倒していきました。「あやとり読書会」では、お母さんたちと、自分の生活の糧とするために、子どもの本を読もうと話しあいを重ねていきました。

しかし、この間に社会は変動し、情報化が促進、情報交換メディアとしての映像が大きく進展してきました。漫画・テレビ・ビデオ等による映像文化の攻勢は、子どももその埒外には置きませんでした。文庫にくる子どもたちの数は減少しはじめました。このほかに、大人による子どもの生活の管理も、子どもを読書から遠ざける原因のひとつに数えられるでしょう。最近、4年生ごろになると、部活が始まるからという理由で文庫をやめていく子どもが目立ちます。部活は大切な活動だと思いますし、あるいは子どもに遊びを指導してくれる場かもしれません。しかし、子どもの自主性のない活動は、子どもの遊びではありません。子どもの生活とは言われません。文庫にくる子どもは、読みたいから読み、見たいから絵本を見ている、遊びの生活を楽しんでいるのです。私はこうした考えで文庫を運営してきました。子どもたちに遊びの楽しさを取り戻してやりたいと、今も思っています。映像がいかに発展しても、人間の思考を育てるには文学によるほかに道はありません。遊びの中で人間としての考え方を身につけていく読書は、決して過小評価してはならないと思っています。

この受賞の言葉からも、「子どもたちの生活体験を大切にし、子どもたちの遊びの生活のなかで、本を読む喜びを経験させようとしていることや、子どもに接する母親をはじめとする大人が子どもの本を読む機会が必要である。」という読書に関する原の考えが伺える。筆者は昨年、「あやとり読書会」で活動されていた佐藤由美子氏から、原先生が「子どもを本好きにするには、まず大人が児童書を手にとって家庭に読書の環境作りをすることが大切である。」と常に話され、保護者向けの「どんぐり通信」を発行して近隣の家庭や文庫に通って来る家庭に配布されていたことを直接伺うことができた。

この通信は、当初はA4版の手書きであり、後にB4版でワープロで作成されている。内容は書評と本の紹介、どんぐり文庫に通う子どもの活動の様子である。通信には、毎号タイトルが付けられ、55年12月6日発行のNo1は「子どもと絵本（1）」である。その後「子どもと絵本」は、（1）～（179）まで15年間毎号掲載されていることから、原が読書環境の要素として絵本を非常に重要に考えていることが分かる。続く56年1月10日号（No2）のタイトルは「伊藤忠記念財団から45万円の助成きまる」で、伊藤忠財団が毎年民間の読書運動に熱心な文庫を対象に助成金を出してその仕事を育成し、昭和55年度の申請が通って、夏の冷房施設と図書の充実にあてることになったと、文庫の読書環境の充実に関わる喜びが表れている。このNo1の「子どもと絵本（1）」、No2の「子どもと絵本（2）」についてのコラムに、絵本に対する原の考えが示されており次項に示す。そして、No3～No180までの各号に、原が薦める絵本が紹介されている。最終号No181は、高齢のため平成8年3月で20年続けた文庫活動を終了する旨の挨拶文となっており、通算して178冊の絵本が紹介されている。（本文の書評を除く）。この通信は、現在長岡市立中央図書館に製本され保存されている。その後、蔵書を富美夫人が勤務していた長岡市立千手小学校に寄贈し仙台に転居されたが、仙台でも大人向けの読書活動を始め、新たに70号の「どんぐり通信」を発行している。こちらは、ご子息の原淳輔氏（東北大学名誉教授）が製本し保管されている。便宜上、No1～No181を「どんぐり通信・長岡版」、仙台でのNo1～No70を「どんぐり通信・仙台版」とする。本稿では、長岡版をもとに原の推薦する絵本を分析する。

4 原の絵本の選書に関する考え

（1）『第23回野間読書推進賞受賞者の言葉』⁷⁾

子どもたちの本への反応、子どもが本の主人公と一体となり、冒険をするたのしさを、そして時には笑いころげ、悲しい状況には涙する反応に接するとき、私は教職時代には得られなかった子どもの理解を得、子どもの本の持つ奥深さに驚かすにはいられませんでした。これが選書に影響していったことはもちろんですが、私自身の子どもの本への本質的興味につながり、子どものためではなく自分自身のために、子どもの本に傾倒していきました。という記述から、子どもたちの本への反応や、子どもが本の世界に入って

主人公と一体となれること、子どもの想像する力を引き出すことができることを、選書の基準としていたことが伺える。

(2)『どんぐり通信「子どもと絵本」(1)』⁸⁾

絵本は、幼い子どもたちの日々の生活の中で自然や社会に対する、不思議さ、珍しさ、驚きなどを体験させる。大きくなって本好きになるためには、幼いときに優れた物語絵本によって、心の中に美しい豊かなイメージを描ける子どもにしておくことが大切である。本が好きになる第一の要件は、読んだことが映画のスクリーンをみるように、頭のなかに生き生きとした絵が描けるということだ。優れた絵本は感動的な絵でこの子どもたちのイメージの力を伸ばしてくれる。

『「どんぐり通信」「子どもと絵本(2) よい絵本とは…」』⁹⁾

よい絵本の第一条件は、絵に魅力があるということである。絵が話を運んでおり、絵がダイナミックで読み手の心を躍動させることが第一である。次に、文章は子どもたちの自由な想像力に訴えることができるように、彼らの生活語を生かして、リズムのある美しい日本語で表現していることが大切である。また、作品に表現されている感情や思想は、人間の健康な生活と豊かな心の源泉となるものであることも必要である。

上記(1)、(2)から、よい絵本の条件として、原が以下の6点を示していることが分かる。

① 子どもの日常生活の中での不思議さ、珍しさ、驚きなどが体験できること ②子どもが本の世界に入って一体となれること ③絵の魅力、絵が話を展開し、読み手の心を躍動させること ④感動的な絵で心のなかに美しい豊かなイメージを描けること ⑤文章が子どもたちの想像力をかきたてるリズムのある美しい日本語であること ⑥作品に表現されている感情や理想が人間の健康な生活と豊かな源泉となるものと明確に示している。

これらの条件は、小学校学習指導要領解説 国語編「第4章指導計画の作成と内容の取扱い 3 教材についての配慮事項」¹⁰⁾につながるものであり、幼児期の読書経験や原の示す絵本選択の観点は、小学校での教材選択の観点とも関連していると考ええる。(尚、この教材選定の観点は、昭和33年版小学校学習指導要領から掲載されている。但し、昭和52年版を除く。)

(2) 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。

- ア 国語に対する関心を高め、国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。
- イ 伝え合う力、思考力や想像力及び言語感覚を養うのに役立つこと。
- ウ 公正かつ適切に判断する能力や態度を育てるのに役立つこと。
- エ 科学的、論理的に物事を捉え考察し、視野を広げるのに役立つこと。
- オ 生活を明るくし、強く正しく生きる意志を育てるのに役立つこと。
- カ 生命を尊重し、他人を思いやる心を育てるのに役立つこと。
- キ 自然を愛し、美しいものに感動する心を育てるのに役立つこと。
- ク 我が国の伝統と文化に対する理解と愛情を育てるのに役立つこと。
- ケ 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家、社会の発展を願う態度を育てるのに役立つこと。
- コ 世界の風土や文化などを理解し、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

5 児童文学作家斎藤惇夫から見た原豊一郎の実践

児童文学作家の斎藤惇夫は、原が教員時代に読み聞かせを続けた教え子である。小学校2～4年生の時の担任であった恩師の原豊一郎について、「60年前からずっと」と題して、月刊『母の友』に次のように

述べている。

仙台にお住まいの小学校時代の恩師、原豊一郎先生から、大きなダンボール10箱ぶんほど、先生が愛蔵なさっていた本が送られてきました。先生は教壇を去ってから、故郷の長岡市で文庫活動をなさっていたのですが、70代に息子さんの住む仙台市に越されました。文庫の本のほとんどは、長岡の千手小学校に寄贈され、やがてそれが基になって、千手小学校の図書室は県下でも有数のものになっていきます。(中略)まったくよく物語を読んでくださる先生でした。(中略)原先生が読んでくださった物語と、読んでくださった姿勢そのものが、私の読書の方向や、趣味や生き方に大きな影響を与えたと気づいたのは、ずっとあとになって、子どもの本の編集をするようになってしばらくたってからのことです。(中略)けれども、送っていただいた本を見ながら、そして私も二度ゆっくりと長岡のご自宅で拝見し、のちに千手小学校に寄贈された本を思い出しながら、ほんとうは、先生もまた、(また、というのは、石井桃子さんや瀬田貞二さんが戦後なさったと同じように、という意味です)ご自分が面白いと思われた本のみを選び、それを読み続けてくださった。そして私たちと一緒に楽しんでいらした—そのことだけがよくわかりました。一体、自分が本当に面白いと思ったもの以外を、子どもたちに読み、薦めることなどできるでしょうか。しかも、その面白いと思う自分の感覚を、確かめ、深め、常に子どもたちと共有できるところまで磨きあげておく。それが教師なのでしょう。そのために読み続けてきたのが、送ってくださった本なのだ、と思ったのです。¹¹⁾

この斎藤の、「自分が面白いと思う感覚を常に共有できるところまで磨き上げておくのが教師である。」という記述は、教育にあたる一人ひとりの教師が絵本に限らず、教材を提示し教える際に必要なことを示している。

筆者も大学時代にどんぐり文庫に伺い、天井まで積み上げられた本を見ながら、原先生から直接文庫の活動について話を聞く機会を得た。また、去年は、前述の佐藤由美子氏の体験を聞くと共に、千手小学校の図書館に引き継がれたどんぐり文庫を視察し、実際に幼児期にどんぐり文庫に親子で通った現千手小学校千田教諭から、「原先生が本を選ぶのに迷うと助言してくださったこと、『ぐりとぐら』が一番心に残っていること、母親と通った文庫の活動が自分の読書活動の原点であること」を伺うことができた。それらのことを通し、幼児期の読書活動にとって家庭や文庫の活動がいかに読書環境として大きな役割を果たしたのかを再認識し、また、読書を通して子どもと親が語り合う親子読書の意義も実感できたのである。

どんぐり通信について、最盛期150人が通い、小学校高学年くらいから文庫に通う子どもたちが様々な理由から減少してきたという原の記述を読み、児童文学作家石井桃子が、1958年(昭和33年)に自宅に開設した「かつら文庫」という図書室の7年間の経過の記録『子どもの図書館』(1965)に記された子どもたちの記録と重なる点を感じた。石井は、「子どもが、本(文学)の世界にはいつて得る利益は、大きく分けて二つあると思います。一つは、そこから得た自分の考え方、感じ方によって、将来、複雑な社会で立派に生きてゆかれるようになること、それからもう一つは、育ってゆくそれぞれの段階で、心の中で、その年齢で一ばんよく享受できる、たのしい世界を経験しながら大きくなってゆかれることです。(中略)しかし、想像力が今ほど必要な時はないのではないのでしょうか。その世界へ幼いうちに楽しくはいつてゆき、人間らしく育ってゆくにはどうしたらいいのか、それを本と結びつけて考えたい、というのが、私のこの数年来の努力であり、この本は、その勉強の中間報告です」¹²⁾と述べている。斎藤が指摘するように、原の文庫活動は、本を通して想像力を育み、その年齢で最も享受できる楽しい世界を経験することの大切さを感じて実践した石井の活動と通じるものがあると考えられる。「かつら文庫の50年」の集いで、かつら文庫に通った阿川尚之、佐和子兄妹が語った思い出話と、どんぐり文庫に通った千田教諭の話からも、本が身近にある環境の大切さを後に感じ、本の読み聞かせ、文庫の活動を通して読書の世界へ導かれた経験は、それぞれの文庫に通った子どもたちに共通するものがあるのではないかと思われる。

6 「どんぐり通信・長岡版」に紹介された絵本の分類と考察

(1) 絵本の分類

絵本の分類については、「書き手の伝達内容を基準とすれば、『知識（科学・非文学）絵本』と『情操絵本（芸術・文学）絵本』に大きく分けられる。絵本のオーソドックスな姿は、『情操絵本』のうちの文学的創作絵本に求められる。」¹³⁾（『国語教育大辞典』）また野上秀子は、「知識絵本」（認識絵本・科学絵本）、「物語絵本」（創作絵本・昔話絵本）、「詩や言葉の絵本」「しかけ絵本」等に分類している。¹⁴⁾

今回、筆者は、原の紹介した絵本を、原の示す絵本についての考えに基づき、「知識・科学絵本」「創作絵本」「昔話絵本」「詩や言葉の絵本」「しかけ絵本」「写真絵本」という項目で分類することとした。

*次頁以降の分類表について

～原則として、「どんぐり通信」のNo、通信の発行年、書名、作者は「どんぐり通信」から転記した。書名の発行年、発行所、初出の西暦は通信に記載のないもの及び分類は筆者が記した。（絶版・再版となっている書籍は可能な限り、初出を記した。また昔話の再話は、昔話に分類した。また、絶版等で確認できなかった絵本は、どんぐり通信の書評を参考に分類した。）

(2) 「どんぐり通信・長岡版」178冊の絵本の分類

表1 「どんぐり通信・長岡版」の絵本の分類

分類	冊数	割合
創作絵本	106	59.6%
昔話絵本	10	5.6%
知識・科学絵本	43	24.2%
言葉・詩の絵本	16	9%
しかけ絵本	2	1.1%
写真絵本	1	0.5%
合計	178	100%

（割合は、小数第2位を四捨五入した。）

〈分類の考察〉

・絵本の多くが創作絵本であり、全体の約6割を占めている。いずれも「絵」に力があり、子どもたちをお話の世界に引き込む魅力がある。文字が読めない幼児にとっては、絵から想像する部分が極めて大きい。一例として、マーシャ・ブラウンの『ちいさなヒッポ』の力強いカラー版画は、カバの子どもヒッポの冒険を楽しく表現している。また、『100まんびきのねこ』のワンダ・ガアグの絵は、黒一色であるが、ストーリー

の展開とよく調和している。昔話絵本の『ゆきおんな』は、朝倉摂の描画や色遣いが松谷みよ子の文と共に、儚く不思議な世界を表現している。

- ・知識・科学絵本は、福音館の『かがくのとも』シリーズのものが多く、人間の体、機械、昆虫など多岐にわたり、科学的なテーマが、ストーリーをもって描かれているもの、図鑑的なものも含まれる。身近な虫や草花、人体などについて、好奇心をもって知る喜びが味わえる。かこさとしの科学絵本は、緻密であるが、難しいことを易しく表現していると感じる。『よわいかみ つよいかたち』は二度紹介されている。また、『けんこうだいいち』（マンロー＝リーフ作）は、健康についてユーモアを交えた文章が子どもにとって分かりやすい。
- ・言葉・詩の絵本は、全体の9%と少ないが、『なぞなぞ遊び歌』（角野栄子作・スズキコージ絵）、『びりのきもち』（阪田寛夫詩、和田誠絵）など、言葉の響きや日本語の美しさが絵と共に親しめる。また、擬音語のみの、『もけら もけら』（山下洋輔作）が紹介されている。空に雲の浮かんだような絵は、音の世界を絵で想像させる。しかし、分類の際の一例として、同じ山下洋輔作の「ドオン!」のように、音の世界を言葉で表しているが、ストーリー性の強い作品は、絵本の構成要素を考慮して「創作絵本」として分類するなど、他の分類と重複するものは構成要素の特色を基に分類した。
- ・写真絵本として、姉崎一馬作の『はるにれ』が紹介されている。北海道の原野で一年間カメラを据え、一本のハルニレの木を見つめ、一日の時間や四季の移ろいによって微妙に変化する表情を丹念にとらえている。作者の自然への愛情が感じられ、子供たちにこうした静かな美しさを愛する心を育てたいという、原の願いから紹介されていると考える。

表2 「どんぐり通信～子どもと絵本」 書名等一覧

号	発行年	書名	作者・絵・訳等	出版社	発行年	分類
NO.3	S56.2.7	「とこちゃんはどこ」	松岡享子・作 加古里子・絵	福音館書店	1970	創作絵本
NO.4	S56.2.7	「大きなかぶ」	ロシア民話 トルストイ再話 佐藤忠良・絵	福音館書店	1966	昔話絵本
NO.5	S56.4.4	「タンタンのずぼん」	いわむらかずお・作	偕成社	1976	創作絵本
NO.6	S56.5.9	「これはのみのピコ」	谷川俊太郎・作 和田誠・絵	サンリード	1979	言葉・詩の絵本
NO.7	S56.4.4	「ひとまねこざる びょういんへいく」	マーガレット・レイ・作 H・A・レイ・画	岩波書店	1968	創作絵本
NO.8	S56.7.4	「おじょうさん」	田島征三・作	福音館書店	1981	創作絵本
NO.9	S56.8.8	「おばけのバーバパパ」	アネット・チゾン、テイラス・テイラー・作・絵 山下明生・訳	講談社	1972	創作絵本
NO.10	S56.9.5	「ぶたたぬききつねねこ」	馬場のぼる・作	こぐま社	1978	創作絵本
NO.11	S56.10.3	「きょうりゅうたち」	ベギー・バリッシュ・文 アーノルド・ローベル・絵	文化出版局	1976	知識・科学絵本
NO.12	S56.11.7	「どろんこハリー」	ジーン・ジオン・文 M・プロイ・クレアム・絵	福音館書店	1964	創作絵本
NO.13	S56.12.5	「ろくべえ まってろよ」	灰谷健次郎・作 長新太・画	文研出版	1978	創作絵本
NO.14	S57.1.9	「わたしのワンピース」	にしまきかやこ・作	こぐま社	1969	創作絵本
NO.15	S57.2.6	「どろんここぶた」	アーノルド・ローベル・作 岸田衿子・訳	文化出版局	1971	創作絵本
NO.16	S57.3.6	「だるまちゃんと てんぐちゃん」	加古里子・文・絵	福音館書店	1967	創作絵本
NO.17	S57.4.3	「ろけっとこざる」	H・A・レイ・文・絵 光吉夏弥・訳	岩波書店	1959	創作絵本
NO.18	S57.5.1	「からすのパンやさん」	加古里子・文・絵	偕成社	1973	創作絵本
NO.19	S57.6.5	「じごくのそうべえ」	田島征彦・作	童心社	1978	昔話絵本
NO.20	S57.7.3	「ロージーのおさんぽ」	バット・ハッチンス・作 わたなべしげお・訳	偕成社	1975	創作絵本
NO.21	S57.8.7	「だるまちゃんとかみなりちゃん」	加古里子・文・絵	福音館書店	1968	創作絵本
NO.22	S57.9.4	「ぐりとぐら」	なかがわりえこ・文 おおむらゆりこ・絵	福音館書店	1967	創作絵本
NO.23	S57.10.2	「かえるがみえる」	松岡享子・作 馬場のぼる・絵	こぐま社	1975	言葉・詩の絵本
NO.24	S57.11.6	「おおきなおおきなおいも」	赤羽末吉・作・絵	福音館書店	1972	創作絵本
NO.25	S57.12.4	「クリスマスってなあに」	ディック・ブルーナ・作 舟崎靖子・訳	講談社	1982	創作絵本
NO.26	S58.1.8	「あしのうらははなし」	やぎゅうけんいちろう・作	福音館書店	1982	知識・科学絵本
NO.27	S58.2.5	「おりょうりとうさん」	さとう わき子・作	フレール館	1977	創作絵本
NO.28	S58.3.5	「クッキー・サーカス」	むらた しげる・作	文化出版局	1982	創作絵本
NO.29	S58.4.9	「ははのはなし」	加古里子・文・絵	福音館書店	1966	知識・科学絵本
NO.30	S58.5.7	「ぼくのばんわたしのばん」	神沢利子・文 林 明子・絵	福音館書店	1978	知識・科学絵本
NO.31	S58.6.4	「かわ」	加古里子・文・絵	福音館書店	1966	知識・科学絵本
NO.32	S58.7.2	「あな」	谷川俊太郎・作 和田誠・絵	福音館書店	1976	創作絵本
NO.33	S58.8.6	「びーんちゃんとふいーんちゃん」	ディック・ブルーナ・文・絵 いしいももこ・訳	福音館書店	1968	創作絵本
NO.34	S58.9.3	「11びきのねこ」	馬場のぼる・作	こぐま社	1967	創作絵本
NO.35	S58.10.1	「おなら」	長新太・作	福音館書店	1983	知識・科学絵本
NO.36	S58.11.5	「ふたりはともだち」	アーノルド・ローベル・作 三木卓・訳	文化出版局	1972	創作絵本
NO.37	S58.12.3	「十二支の年越し」	川端誠・作	リプロポート	1983	知識・科学絵本
NO.38	S59.1.7	「いたずらきかんしゃ ちゅうちゅう」	バージニア・リー・バートン・文・絵 村岡花子・訳	福音館書店	1983	創作絵本
NO.39	S59.2.4	「ゆきおんな」	まつたにみよこ・文 あさくらせつ・絵	ポプラ社	1969	昔話絵本
NO.40	S59.3.3	「めのまどあけろ」	谷川俊太郎・作 長新太・絵	福音館書店	1981	言葉・詩の絵本
NO.41	S59.4.7	「ハリーのセーター」	ジーン・ジオン・文 M・プロイ・クレアム・絵 わたなべしげる・訳	福音館書店	1983	創作絵本
NO.42	S59.5.12	「はじめてのおつかい」	筒井頼子・文 林 明子・絵	福音館書店	1976	創作絵本
NO.43	S59.6.2	「くまちゃんのいちにち」	加古里子・作	福音館書店	1970	知識・科学絵本
NO.44	S59.7.7	「わたし」	谷川俊太郎・作 長新太・絵	福音館書店	1981	知識・科学絵本
NO.45	S59.8.4	「ねずみくんのチョコキ」	なかえよしを・作 上野紀子・絵	ポプラ社	1974	創作絵本
NO.46	S59.9.1	「もしもぼくのせいがのびたら」	にしまきかやこ・作	こぐま社	1980	創作絵本
NO.47	S59.10.6	「だいくとおにろく」	松居直・再話 赤羽末吉・絵	福音館書店	1967	昔話絵本
NO.48	S59.11.10	「三びきのくま」	ポール・ガルトン・作 ただひろみ・訳	ほるぶ出版	1978	創作絵本
NO.49	S59.12.1	「あかいかさ」	ロバート・ブライト・作 しみずまさこ・訳	ほるぶ出版	1975	創作絵本
NO.50	S60.1.7	「ガラスめだまと きんのつのやぎ」	白ロシア民話 田中かな子・訳 スズキコージ・画	福音館書店	1985	昔話絵本
NO.51	S60.2.2	「あさえと ちいさいいもうと」	筒井頼子・文 林 明子・絵	福音館書店	1979	創作絵本
NO.52	S60.3.2	「ねないこ だれだ」	せなけいこ・作	福音館書店	1969	創作絵本
NO.53	S60.4.6	「タンタンのハンカチ」	いわむらかずお・作	偕成社	1981	創作絵本
NO.54	S60.5.4	「よわいかみ つよいかたち」	加古里子・文・絵	童心社	1968	知識・科学絵本
NO.55	S60.6.1	恐竜ライブラリー 「プロントサウルス」	アンジェラ・シーハン・文 コリン・ニューマン・絵	佑学社	1979	知識・科学絵本
NO.56	S60.7.6	「ワニのライルとなぞの手紙」	バーナード・ウェーバー・作 小杉佐恵子・訳	大日本図書	1984	創作絵本
NO.57	S60.8.3	「めっくら もっくら どおん どん」	長谷川摂子・作 ふりやなな・画	福音館書店	1985	創作絵本
NO.58	S60.9.6	「きみなんだいきらいさ」	ジャニス・メイ・アドリー・文 モーリス・センダック・絵	富山房	1975	創作絵本
NO.59	S60.10.5	「へへのもへじ」	高梨章・文 林明子・絵	福音館書店	1978	創作絵本
NO.60	S60.11.2	「くさる」	なかのひろたか・作	福音館書店	1981	知識・科学絵本
NO.61	S61.1.4	「よわいかみ つよいかたち」	加古里子・文・絵	童心社	1968	知識・科学絵本
NO.62	S61.2.1	「バーバパパのこもりうた」	アネット・チゾン、タラス・テイラー・絵 山下明生・訳	講談社	1976	創作絵本
NO.63	S61.3.1	「どんぶつなんでも世界一」	アネット・チゾン、タラス・テイラー・絵 佐藤見果夢・訳	評論社	1985	知識・科学絵本
NO.64	S61.4.5	「かせひき たまご」	舟崎克彦・文 杉浦範茂・絵	講談社	1986	創作絵本
NO.65	S61.5.2	「タンタンのハンカチ」	いわむらかずお・作	偕成社	1977	創作絵本

号	発行年	書名	作者・絵・訳等	出版社	発行年	分類
NO.66	S61.6.7	「ブルーベリーもりでの ブッテのぼうけん」	エルサ・ベスコフ・作・絵 おのでらゆりこ・訳	福音館書店	1977	創作絵本
NO.67	S61.7.5	「1・2・3 どうぶつえんへ」	エリック・カール・構成・絵	偕成社	1970	知識・科学絵本
NO.68	S61.8.16	「かぶとむしはどこ？」	松岡達英・作	福音館書店	1986	知識・科学絵本
NO.69	S61.9.20	「ぞうのババール」	ジャン・ド・ブリュフ・作 矢川澄子・訳	評論社	1974	創作絵本
NO.70	S61.10.18	「さんまいのおふだ」	水沢謙一・再話 梶山俊夫・画	福音館書店	1985	昔話絵本
NO.71	S61.11.15	「ママときかんぼ ぼうや」	バルプロ・リンドグレン・作 小野寺百合子・訳	佑学社	1981	創作絵本
NO.72	S61.12.13	「スプーンおばさんの クリスマス」	アルフ・プリョイセン・作 ビョーン・ベイル・絵 おつかゆうぞう・訳	偕成社	1979	創作絵本
NO.73	S62.1.17	「ぼちぼち いこか」	マイク・セイラー・作 ロバート・グロスマン・絵 いまえよしとも・訳	偕成社	1980	創作絵本
NO.74	S62.2.14	「てんにのぼったなまず」	たじまゆきひこ・作	福音館書店	1985	創作絵本
NO.75	S62.3.14	「マクスとモーリスのいたずら」	ビルヘルム・ブッシュ・作 上田真而子・訳	岩波書店	1986	創作絵本
NO.76	S62.4.1	「いまはむかし さかえるかえるのものがたり」	まつおかきょうこ・作 馬場のぼる・絵	こぐま社	1987	創作絵本
NO.77	S62.5.16	「ほね」	堀内誠一・作	福音館書店	1981	知識・科学絵本
NO.78	S62.6.13	「たたく」	谷川俊太郎・文 今井弓子・絵	福音館書店	1979	知識・科学絵本
NO.79	S62.7.11	「アンガスとあひる」	マージョリー・フラック・作・絵 瀬田貞二・訳	福音館書店	1974	創作絵本
NO.80	S62.9.12	「旅の中を旅する」	シルビー・ラフェレル クレール・メルロ ＝ボンティアンス・タルディ・編著 大西昌子・広・訳	福音館書店	1987	創作絵本
NO.81	S62.10.17	「ねむい ねむい ねずみのクリスマス」	ささきまき・作・絵	PHP研究所	1982	創作絵本
NO.82	S62.11.14	「こぶたのマーチ」	やまむらけいこ・作 ほりうちせいいち・絵	福音館書店	1969	創作絵本
NO.83	S62.12.12	「きっとみんなよろこぶよ！」	ピーター・スピアー・作・絵 松川真弓・絵	評論社	1987	創作絵本
NO.84	S63.1.16	「あなはほるものおこちるとこ」	ルース・クラウス・文 モーリス・センダック・絵 わたなべしげお・訳	岩波書店	1979	言葉・詩の絵本
NO.85	S63.2.13	「ゆきおんな」	まつたにみよこ・再話 あさくらせつ・絵	ポプラ社	1969	昔話絵本
NO.86	S63.3.12	「みんなのからだ」	グウィン・ビバース・文 サラ・ブーリー・絵 小林昇、 中山知子・共訳	西村書店	1987	知識・科学絵本
NO.87	S63.4.9	「いちねんせい」	谷川俊太郎・詩 和田誠・絵	小学館	1987	言葉・詩の絵本
NO.88	S63.5.7	「どうやってみをまもるのかな」	やぶうちまさゆき・作	福音館書店	1987	知識・科学絵本
NO.89	S63.6.4	「ウォーリーをさがせ！」	マーティン・ハンドフェード・作・絵	福音館書店	1987	創作絵本
NO.90	S63.7.2	「ばしん！ばん！どかん！」	ピーター・スピアー・作 わたなべしげお・訳	富山房	1978	創作絵本
NO.91	S63.8.6	「なぞなぞえほん」	中川絵子・作 長新太・絵	福音館書店	1988	言葉・詩の絵本
NO.92	S63.9.3	「海べのあさ」	マックロスキー・文・絵 石井桃子・訳	岩波書店	1978	創作絵本
NO.93	S63.10.1	「いいおかお」	松谷みよ子・文 瀬川康男・絵	こぐま社	1967	創作絵本
NO.94	S63.11.5	「おじぞうさん」	田島征三・作	福音館書店	1988	創作絵本
NO.95	S63.12.3	「おじいちゃん」	ジョン・バーニンガム・作 谷川俊太郎・訳	ほるぷ出版	1985	創作絵本
NO.96	S64.1.6	「だってだってのおばあさん」	さのようこ・作・絵	フレーベル館	1975	創作絵本
NO.97	H1.2.4	「びりのきもち」	阪田寛夫・詩 和田誠・絵	白泉社	1988	言葉・詩の絵本
NO.98	H1.2.5	「言葉図鑑」	五味太郎・監修・制作	偕成社	1986	言葉・詩の絵本
NO.99	H1.4.1	「にわ。こうえんにくるとり」	薮内正幸・文・絵	福音館書店	1973	知識・科学絵本
NO.100	H1.5.6	「せんろはつづくよ」	M・W・ブラウン・文 J／シャロー・絵 与田準一・訳	岩波書店	1979	創作絵本
NO.101	H1.6.3	ひもほうちょうもつかわない 平野レミの「おりょうりブック」	平野レミ・作 和田唱、和田率・絵 和田誠・デザイン	福音館書店	1992	知識・科学絵本
NO.102	H1.7.1	「親子で遊ぶあやとりの本 あやとりいととり」	さいとう たま 採取・文 つじむらますろう・絵	福音館書店	1982	知識・科学絵本
NO.103	H1.8.5	「こぐまちゃんのみずあそび」	わかやまけん・作	こぐま社	1971	創作絵本
NO.104	H1.9.2	「かくしたの だあれ」	五味太郎・作	文化出版局	1977	知識・科学絵本
NO.105	H1.10.7	「なぞなぞ あそびうた」	角野榮子・作 スズキコージ・絵	のら書店	1989	言葉・詩の絵本
NO.106	H1.11.4	「おかえし」	村山佳子・作 織茂恭子・文	福音館書店	1989	創作絵本
NO.107	H1.12.2	「るすばんをしたオルリック」	デビッド・マーキー・絵 はら しょう・訳	アリス館牧新社	1976	知識・科学絵本
NO.108	H2.1.6	「おっと あぶない」	マンロー・リーフ・作 わたなべしげお・訳	学習研究社	1986	創作絵本
NO.109	H2.2.7	ジブシーの昔話 「なんでも見える鏡」	フィツォフスキ・再話 内田莉砂子・訳 スズキコージ・画	福音館書店	1989	昔話絵本
NO.110	H2.3.3	「幼稚園にいったともちゃんと こぐまくん」	あまんきみこ・作 西巻茅子・絵	福音館書店	1988	創作絵本
NO.111	H2.4.7	「おばけの縁日」	川端誠・作	リプロポート	1988	創作絵本
NO.112	H2.1.10	「ニワトリが道にとびだしたら」	デビッド・マコーレイ・文・絵 小野 耕世・訳	岩波書店	1988	創作絵本
NO.113	H2.6.2	「ある池のものがたり」	三芳徳吉・作	福音館書店	1986	知識・科学絵本
NO.114	H2.7.7	「おとくなサイはいかがです？」	シェル・シルバスタイン・作・絵 よしかわみちお・訳	篠崎書林	1988	創作絵本
NO.115	H2.8.4	「はるにれ」	写真 姉崎一馬	福音館書店	1979	写真絵本
NO.116	H2.9.1	「くつくつ みつけた」	トミー・ウンゲラー・作 五味太郎・訳	架空社	1987	創作絵本
NO.117	H2.10.6	「のりものあれあれ絵本」	石川重遠・作	文化出版局	1979	しかけ絵本
NO.118	H2.11.10	「ちいさなヒッポ」	マーシャ・ブラウン・作 うちだりさこ・訳	偕成社	1984	創作絵本
NO.119	H2.12.1	「はまべには いしが いっぱい」	レオ・レオニ・作 谷川俊太郎・訳	ペンギン社	1979	知識・科学絵本
NO.120	H3.1.5	「やまなしもぎ」	平野直・再話 太田大八・画	福音館書店	1977	昔話絵本
NO.121	H3.2.2	「道具と機械の本」	歌崎秀史・訳	岩波書店	1990	知識・科学絵本
NO.122	H3.3.2	「もけら もけら」	山下洋輔・文 元永定正・絵 中辻悦子・構成	福音館書店	1990	言葉・詩の絵本
NO.123	H3.4.6	「りんごがたべたい ねずみくん」	なかえよしを・作 上野紀子・絵	ポプラ社	1975	創作絵本
NO.124	H3.5.11	「はじめまして せかいちず」	高木実・幸子・構成・文 塚本慧三・イラスト	平凡社	1993	知識・科学絵本

号	発行年	書名	作者・絵・訳等	出版社	発行年	分類
NO.125	H3.6.1	「はしをわたらず はしわたれ」	小野おる・作	福音館書店	1991	知識・科学絵本
NO.126	H3.7.6	「せかいの ひとびと」	ピーター・スピアー・絵・文 松川真弓・訳	評論社	1982	知識・科学絵本
NO.127	H3.8.3	「恐竜のなぞ」	アリキ・ブランデンバーク・文・絵 神島統夫・訳 小島郁生・監修	福武書店	1986	知識・科学絵本
NO.128	H3.9.7	「しでん と たまご」	川崎洋・作 佐藤国男・絵	福音館書店	1981	創作絵本
NO.129	H3.10.5	「じどうしゃ じどうしゃ じどうしゃ」	渡辺茂男・作 大友康夫・絵	あかね書房	1984	創作絵本
NO.130	H3.11.2	「ちいさなヒッポ」	マーシャ・ブラウン・作 うちだりさこ・訳	偕成社	1984	創作絵本
NO.131	H3.12.7	「ちいさなクリスマスのほん」	佐々木マキ・絵	福音館書店	1991	創作絵本
NO.132	H4.1.11	「あいえおばけだぞかるた」	五味太郎・作	絵本館	1991	言葉・詩の絵本
NO.133	H4.2.1	「にげだした ひげ」	シビル・ウエッタシンハ・作 のぐちただし・訳	福武書店	1988	創作絵本
NO.134	H4.3.7	「おかえし」	村木桂子・作 織茂恭子・絵	福音館書店	1985	創作絵本
NO.135	H4.4.4	「ヘンなえほん」	井上洋介・作	ほるぷ出版	1991	創作絵本
NO.136	H4.5.2	「どんな絵できた？」	五味太郎・作	クレヨンハウス	1991	知識・科学絵本
NO.137	H4.6.6	「ままです すきです すてきです」	谷川俊太郎・作 タイガー白石・絵	福音館書店	1986	言葉・詩の絵本
NO.138	H4.7.4	「おさるとぼうしうり」	エズフィール・スロボドキーナ・作・絵 松岡享子・訳	福音館書店	1970	創作絵本
NO.139	H4.8.8	「はしれ！かもつたちの ぎょうれつ」	ドナルド・クリューズ・作 たむらりゅういち・訳	評論社	1980	知識・科学絵本
NO.140	H4.9.5	「ぶんぶん ぶるるん」	バイロン・バートン・作 てじまゆうすけ・訳	ほるぷ出版	1975	創作絵本
NO.141	H4.10.3	「日曜日の歌」	長谷川集平・作	好学社	1981	創作絵本
NO.142	H4.11.7	「みんな とぶぞ」	佐々木マキ・作・絵	サンリード	1980	創作絵本
NO.143	H5.1.9	「おんなのこって なあに！ おとこのこって なあに！」	ステファニー・ワックスマン・著 山本直英・訳	福音館書店	1992	知識・科学絵本
NO.144	H5.2.6	「そりあそび」	さとうわきこ・作・絵	福音館書店	1990	創作絵本
NO.145	H5.3.6	「米でつくる」ほか	家庭科教育研究者連盟・編	大月書店	1987	知識・科学絵本
NO.146	H5.4.3	「へんでこハウス」	たむらしげる・作・絵	岩崎書店	1982	知識・科学絵本
NO.147	H5.5.1	「あそぶの だあれ？」	よねやま えいいち・作	創育	1989	創作絵本
NO.148	H5.6.5	「はだか はだか」	やぎゅう げんいちろう・作	福音館書店	1993	知識・科学絵本
NO.149	H5.7.3	「あめのひ」	ユリー・シュルビッツ・作・画 矢川澄子・訳	福音館書店	1972	知識・科学絵本
NO.150	H5.8.7	「昆虫記」	今森光彦・作	福音館書店	1988	知識・科学絵本
NO.151	H5.9.4	「魔女図鑑」	マルカム・バード・作・絵 岡部史・訳	金の星社	1992	創作絵本
NO.152	H5.10.2	「ことば」	五味太郎・絵	架空社	1993	言葉・詩の絵本
NO.153	H5.11.6	版画「のはらうた」	工藤直子・詩 保手浜孝・画	童話屋	1992	言葉・詩の絵本
NO.154	H5.12.4	「けんこう だいいち」	マンロー・リーフ・作 わたなべしげお・絵	学習研究社	1969	知識・科学絵本
NO.155	H6.1.8	「菌いしゃのチュー先生」	ウィリアム・スタイング・作・絵 うつみまお・訳	評論社	1991	創作絵本
NO.156	H6.2.5	「はいろひめさま かぞえうた」	ささきまき・作	絵本館	1993	言葉・詩の絵本
NO.157	H6.3.5	「アボガド・ベイビー」	ジョン・バーニンガム・作 青山南・訳	ほるぷ出版	1993	創作絵本
NO.158	H6.4.2	「わにさん どきっ はいしゃさんどきっ」	五味太郎・絵	偕成社	1984	創作絵本
NO.159	H6.5.7	「ロバの おうじ」	M. ジーン・グレーグ再話 バーバラ・クーニー・作	ほるぷ出版	1979	昔話絵本
NO.160	H6.6.4	「ものき なしのき プラムのき」	アラン・アールパーク・作 ジャネット・アールパーク・絵 佐藤涼子・訳	評論社	1981	創作絵本
NO.161	H6.7.2	「月ようびはなにたべる？」	エリック・カール・絵 もりひさし・訳	偕成社	1994	言葉・詩の絵本
NO.162	H6.8.6	「ねこのおんせん」	別役真・作 佐野洋子・絵	教育画劇	1986	創作絵本
NO.163	H6.9.3	「もりへ さがしに」	村田清司・絵 田島征三・文 宮崎喜一・構成	偕成社	1991	創作絵本
NO.164	H6.10.1	「おばあちゃん」	大森真貴乃・作	ほるぷ出版	1987	創作絵本
NO.165	H6.11.5	「さかさまライオン」	内田麟太郎・文 長新太・絵	童心社	1985	創作絵本
NO.166	H6.12.3	「あつさのせい？」	スズキ コージ・作	福音館書店	1994	創作絵本
NO.167	H7.1.7	「コッコさんのともだち」	片山健・作・絵	福音館書店	1991	創作絵本
NO.168	H7.2.4	「ほね」	堀内誠一・作	福音館書店	1981	知識・科学絵本
NO.169	H7.3.4	「ものき なしのき プラムのき」	アラン・アールパーク・作 ジャネット・アールパーク・絵 佐藤涼子・訳	評論社	1981	創作絵本
NO.170	H7.4.1	「うんちがぼとん」	アロナ・フランケル・作 さくまゆみこ・訳	アリス館	1984	創作絵本
NO.171	H7.5.6	「ねずみの菌いしゃさん アフリカへいく」	ウィリアム・スタイグ・作 木坂 涼・訳	セーラー出版	1995	創作絵本
NO.172	H7.6.3	「ドオン！」	山下洋輔・文 長新太・絵	福音館書店	1995	創作絵本
NO.173	H7.7.1	「ふたつあるものなあに」	構成ルーシー・ミクススウェイト ことば 俵万智	フレール館	1995	知識・科学絵本
NO.174	H7.8.5	「まんいんでんしゃ」	かとうちゃこ・絵 わたなべしげお・文	福音館書店	1993	創作絵本
NO.175	H7.9.2	「ぎょうれつぎょうれつ」	マリサビーナ・ルッソ・絵と文 青木久子・訳	徳間書店	1994	創作絵本
NO.176	H7.9.2	「キツネのホイティ」	シビル・ウエッタシンハ・作 松岡享子・訳	福音館書店	1994	創作絵本
NO.177	H7.11.4	「うんちしたのはだれよ！」	ヴァルナー・ホルツヴァルト・文 ヴォルフ・エールブルッフ・絵 関口裕昭・訳	偕成社	1993	創作絵本
NO.178	H7.12.2	「ネズミのヒコーキ」	たむらしげる・作	あかね書房	1994	創作絵本
NO.179	H8.1.13	「ともだちつれてよろしいですか」	ベアトリス・シェンク・ド・レーニエ・文 ベニ・モントレーソ・絵 渡辺茂雄・訳	富山房	1983	創作絵本
NO.180	H8.2.17	「ちいさなちいさなえほんばこ」	モーリス・センダック・作	富山房	1981	創作絵本

7 考察

本稿では、「どんぐり通信」に掲載された『子どもと絵本』（絵本の紹介）と「どんぐり文庫」の活動を通して、幼児が絵本を通して言葉を豊かにするための読書環境の充実について考察してきた。幼児期の教育において、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、想像力を育むことは、極めて重要であることが具体的な実践資料を基に明らかになった。幼児の言葉の力の育成には、絵本をはじめとする教材を、幼児の発達段階や一人ひとりの幼児の興味や関心に沿い、生活体験に応じて提示し、家庭と連携して読書環境の充実を図ることが、日々映像の世界に接している幼児には、特に重要であると感じた。また、筆者が北区立の幼稚園において4歳児に『てぶくろ』（ウクライナ民話・エウゲーニー・M・ラチョフ絵・内田莉莎子訳）を読み聞かせした際、絵の力に引き込まれ、繰り返しの楽しさを味わいながら、絵から想像してお話の展開を楽しんでいる姿が見られたことから、絵本における絵の力の大きさを改めて感じた。今後は、幼児の言葉の発達段階に即した絵本の選択の在り方等について一層研究を深めたい。

注

- 1) 文部科学省 幼稚園教育要領 (2017)
- 2) 『改訂新版 保育内容「言葉」言葉とふれあい、言葉で育つ』 大越和孝ほか編
大越和孝・野口隆子・野上秀子・林 嘉瑞子ほか著 東洋館出版社 (2018) 野口隆子 pp25・28
- 3) 文部科学省 幼稚園教育要領 (1964)
- 4) 文部科学省 幼稚園教育要領 (1989)
- 5) 2に同じ 野口隆子 pp24-25
- 6) 社団法人読書推進運動協議会『読書推進運動協議会の50年』（別冊）(2011年3月)
- 7) 6に同じ
- 8) 原豊一郎『どんぐり通信』（1981年2月～1996年2月）
- 9) 8に同じ
- 10) 文部科学省 小学校学習指導要領解説 国語編 (2017)
- 11) 斎藤惇夫『母の友』『旅の仲間たち（6）原先生』 福音館書店 (2008)
- 12) 石井桃子『新編 子どもの図書館』 岩波書店 (2015)
- 13) 国語教育研究所編『国語研究大辞典』 pp56-57 明治図書 (1991)
- 14) 2に同じ 野上秀子 pp122-130

参考文献

- 『別冊こどもとしょかん かつら文庫の50年』 東京こども図書館 (2008)
- 張替恵子ほか編集『絵本の庭へ 児童図書館基本蔵書目録1』 東京子ども図書館 (2012)
- 張替恵子ほか編集『物語の森へ 児童図書館基本蔵書目録2』 東京子ども図書館 (2017)
- ポール・アザール著 矢崎源九郎、横山正矢訳『本・子ども・大人』 紀伊国屋書店 (1957)
- 瀬田貞二『幼い子の文学』 中央公論新社 (1980)
- リリアン・H・スミス、石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男訳『児童文学論』 岩波書店 (1964)
- アイリーン・コルウェル、松岡享子ほか訳『子どもたちをお話の世界へ』 こぐま社 (1996)
- 松岡享子『えほんのせかい こどものせかい』 文藝春秋 (2017)
- 朝日新聞社編集『レオ・レオニ 絵本のしごと』 朝日新聞社 (2012)
- 本吉康成編集『谷川俊太郎 詩と絵本の世界』 玄光社 (2014)
- 朝日新聞社編集『絵本のひきだし 林明子原画展』 朝日新聞社 (2017)
- 新潟県長岡市立千手小学校 学校要覧 (2017)
- 川崎恭子編集『元気いっぱい ばばあちゃん』 石神井公園ふるさと文化館分室 (2018)